『学会開催報告』

第55回日本消化器画像診断研究会

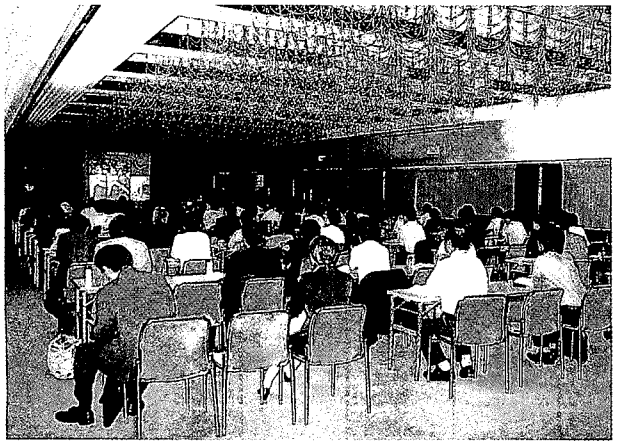
55th Meeting of Japanese Congress of Diagnostic Imaging of Digestive Disease

金沢大学附属病院消化器・乳腺・移植再生外科
（第二外科学）
太田哲生，北川裕久

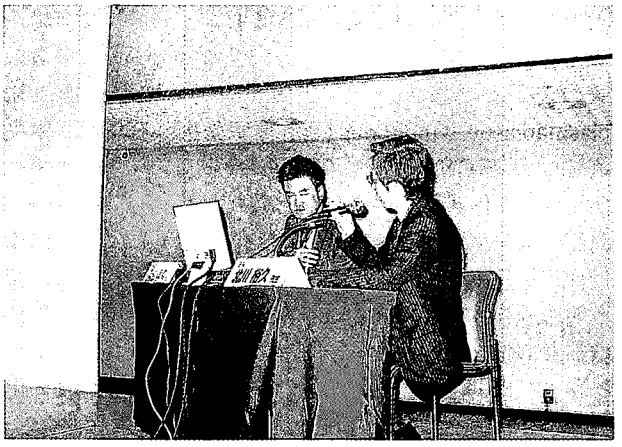
第55回日本消化器画像診断研究会が，金沢大学附属病院消化器・乳腺・移植再生外科教授太田哲生当番世話人の主催で，2011年9月2日（金），3日（土）金沢市文化ホールにて開催されました．

本研究会は，日本の消化器疾患ではトップレベルの内科，外科，放射線科，病理医が一堂に会し，各症例について臨床所見から画像診断，病理に至るまでを徹底的に討論しあうことをコンセプトとしております．今回も1演題20分（発表8分，討論12分）としましたが，それでも時間が足りないほどの熱い討論が繰り広げられました．

特に今回は，「実地臨床に役立つ画像診断と病理の知識」と銘打ち，研究会第1日目には，イブニングセミナーとして，講演Ⅰ「肝胆膵の画像診断：白黒の示唆するもの」を胆膵疾患は当大学経血管診療学の蒲田敏文先生より，肝疾患は信州大学画像医学講座の角谷眞澄先生より賜りました．蒲田先生からは，胆膵の良性から悪性まで様々な疾患における，CT読影の基本から，CTによる造影されかたの違いや，MRIのT1WI，T2WI，その他撮像法から，どのように正しい診断にアプローチしていくべきかを教えていただきました．角谷先生からは，鶏卵のゆで時間で半熟，固ゆでなど卵の固まりかたは異なるが，それを見事にMRIが捉えることができるといった実験的スライドから，それをもとに肝疾患の画像診断がどの様な根拠でなされているのかを科学的に教えていただきました．次に，講演Ⅱ「病理からみた肝胆膵腫瘍と消化管腫瘍の相違点と類似性」をPCLジャパン病理・細胞診センターの渡辺英伸先生より御講演を賜りました．



特に，現在肝胆膵領域で，IPMN，IPNBが話題となっていますが，消化管の病理と照らし合わせると，これらに対応する疾患が稀ではなく存在すること，胆道や膵臓という臓器の物理的な特徴（正常の膵管径は2mm程度で膵実質に囲まれている，膵管・胆管ともに括約筋を持つ細い十二指腸乳頭が出口であるなど）から特殊な形態をとるだけであることを教えていただきました．今後，IPMN，IPBNの研究を進める際に大きな助けとなるであろうと思われました．

研究会第2日目には，教育セミナーとして，当大学消化器・乳腺・移植再生外科北川裕久が「膵癌局所進展の画像診断－病理との対比から」を講演しました．膵頭部癌の進展に関して，画像所見とその部位の病理を1対1で対応させ，エビデンスを持って進展範囲を診断して，局所再発が非常に多いと言われている膵癌の手術術式立案において確実にR0（病理組織学的癌遺残なし）を実践できることをお話し致しました．またランチョンセミナーでは畠二郎先生から「消化管を超音波で診る」の講演を賜りました．体外超音波の進歩も目を見張るものがあり，胃内のアニサキスの動きまでもが写し出されるとは，参加者全員大変な驚きを覚えるとともに，今後当研究会でも肝胆膵にとどまらず，消化管の画像診断にまで発展させていこうという意気込みが生まれました．

今回は予想を大きく上回る人数の参加者がありました．まさに旬である最先端の内容の講演企画に非常に価値のある実り多き研究会であったと思います．